様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２７２８

研究課題名（和文）佚文資料を用いた字書『玉篇』音韻体系の研究

研究課題名（英文）A research on the phonological system of lost texts of the dictionary "Yu-pian"

研究代表者
澤田　達也（Sawada, Tatsuya）

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：２０６４７５９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、６世紀に成立した字書『玉篇』の佚文資料を収集・分類しデータベースを構築した上で、その音韻体系の解明を目指すことである。この目的のために、先行研究に基づいて16種の資料から計1344条の佚文データを収集してデータベースを作成し、その検索ツールとして「玉篇佚文検索システム」を構築しweb上に公開した。同システムでは『玉篇』佚文について（1）「親字」（2）『玉篇』の該当巻（3）「部首」（4）「本文」からの検索が可能である。
また、『玉篇』佚文に含まれる反切音注について、『新訳華厳経音義私記』や『三教指帰注集』、『龍龕手鑑』を対象に考察を行い、国内外での学会発表や論文発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古典辞書のデータベース化は、主要な資料については近年大きく進展しているが、周辺的な資料については依然として充分な状況ではない。そのような状況下で『玉篇』佚文という周辺的資料に関するデータベースを構築したことが本研究の主要な意義である。これまで分散した形で発表されていた佚文資料を一括で扱うことが可能となったことで、関連分野の研究基盤の充実に一定の貢献を果たしたはずである。
また、『玉篇』佚文資料は多くが古代日本において撰述された資料から収集されている。したがって今回構築した「玉篇佚文検索システム」は、中国語学のみならず、日本語学や日本史学、仏教史学などにおいても広く活用が可能なものである。

研究成果の概要（英文）：The goals of this research project are to: 1) construct the database of lost texts of the dictionary "Yu-pian"; 2) attempt to elucidate the phonological system of lost texts of the dictionary "Yu-pian" by using the database constructed through the above work.
To achieve the goals, we collected 1344 data on "Yu-pian" lost texts from 16 types of ancient documents by referring to previous studies, and constructed the database. Subsequently, we built a online search system for the database called "Yu-pian lost-texts search system". The system allows searches from four categories, such as "entry", "volume", "radical", "definition".
We have also presented our research and papers at several domestic and international conferences.

研究分野：人文学

キーワード：中国語学　中国語音韻史　辞書史　データベース　玉篇　佚文　玉篇佚文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

6 世紀中葉に成立した字書『玉篇』は約 16000 条に及ぶ大量の音注資料を収録し、7 世紀初頭に成立した韻書『切韻』同様、中国語音韻史研究において重要な資料となる。しかし、その原本の多くは失われ、現在は唐代に抄写されたとされる残巻が数種伝えられるのみである。そのため『玉篇』に関する研究には従来、『玉篇』に依拠して成立した日本古辞書類（『篆隷萬象名義』、『新撰字鏡』等）や、敦煌・トルファン等で発見された出土文献類等が利用されてきた。

ところが、これら関連資料が反映する『玉篇』のテキストは必ずしも一様ではなく、中には原本に近いと考えられるテキストが見出される一方、他方では宋代以降に成立した『大廣益會玉篇』（いわゆる宋本『玉篇』）に近いテキストも見られ、音韻史研究の対象として扱う際には、まず各テキストの性質を見極める必要があった。しかし、従来の資料だけでは十分なテキスト批判を行うことは難しく、『玉篇』を用いた中国語音韻史研究は、その重要性にもかわらず、1930 年代の周祖謨、河野六郎両氏による研究以降大きな進展がなかった。

しかしその間、伝世古典籍に引用される『玉篇』佚文の収集が徐々に進んでおり、従来の資料の不足分を補うことが期待される。とりわけ、奈良・平安時代以降に日本において編纂された『大乗理趣六波羅蜜経釋文』や『三教指帰成安注』等の仏経音義や『令集解』、『五行大義』等の外典資料に引用された佚文は、上述の日本古辞書や敦煌出土資料などからは解明できなかった時代のテキストを反映している可能性が高く、音韻研究の資料として価値が高い。このような佚文が現在までに約 5000 条収集されており、今後はこれらを整理分類の上、音韻資料として利用していく必要性がある。

ところで、『玉篇』等のいわゆる「小学書」（古典辞書、音義の類）は、近年急速にデジタルデータベース化が進んでいる。特に中国におけるデータベース（DB）化の進展は著しく、『説文解字』、『廣韻』、『康熙字典』等の主要な古典辞書はすでに DB 化され、web 版が公開されている。これら DB の整備に伴い、中国古典学の研究環境は、音韻史研究も含めて大きく変化しつつあるといっても過言ではない。国内においても、古典辞書の DB 化は徐々に進んでおり、『玉篇』関連資料については北海道大学・池田証寿氏の「平安時代漢字字書研究」（HDIC）において『篆隷萬象名義』及び『宋本玉篇』の全文テキストデータが作成、公開されている。また、韻書『切韻』についても大阪大学・鈴木慎吾氏によって関連資料の DB 化が進んでおり、その成果の一部が公開されている（「篇韻データベース」）。

古典辞書の DB 化は、現時点ではまだ主要な資料に留まっているが、今後はその範囲を徐々に周辺関連資料に拡大する必要性がある。

２．研究の目的

字書『玉篇』の佚文資料を収集・分類し、データベース（DB）を構築した上で、その音韻体系の解明を目指す。従来利用されてきた『玉篇』テキストの性質は必ずしも一様ではなく、音韻資料として扱いにくいものであった。しかし、各種古典籍に引用された佚文資料は音韻資料としての価値が高く、6 世紀から 11 世紀にいたる中国語中古音体系の変化をより詳細に考察できるようになる。

また、中国古典学の研究環境は近年急速なデジタルデータベース化によって大きく変化しつつあるが、本研究で構築する『玉篇』佚文 DB により、さらに充実した研究基盤が確立されることとなる。その影響は中国語音韻史研究のみならず、日本語学、仏教史学等の関連分野にも波及すると考える。

（1）対象とする資料の範囲

本研究が対象とする『玉篇』佚文は、現在確認済みのもので約 5000 条存在する。それらは 1933 年から 2015 年に発表された約 30 件の関連論考において公開されているが、各論考の目的がそれぞれ異なるため、統一したフォームを成していない。そのため、本研究においては、まず先行研究によって収集された佚文について、原典との対照を通じて内容の再確認を行う必要がある。

また、新規資料の調査も進め、新たな佚文を収集する。収集した資料については、『篆隷萬象名義』等の関連資料とも対照しながら、収録される典籍の傾向を考察し、体例や条文の内容などを根拠として分類する。

（2）『玉篇』佚文データベースの構築

収集した資料をもとに DB を作成し、資料の対照・分析を進めるための環境を整備する。DB はオンラインにおいて公開する。

（3）データベースを用いた中国語中古音韻体系の分析

作成された DB を用いて、資料内の音注資料（反切など）を整理・分析する。その際に、各資

料間の系統関係についても解明し、『玉篇』原本が成立した 6 世紀から宋本『玉篇』が成立した 11 世紀にいたる音韻変化が佚文資料から見出し得るか検討を行う。

３．研究の方法

(1) 資料の収集及び整理分類：

先行研究を参考に、各種古典籍に引用される『玉篇』佚文を収集し、原資料との対照を行って資料間の異同等を分析した上、主として時代別に分類を行い、データ入力を進めやすい形に整理する。

『玉篇』佚文資料は、岡井慎吾 1933、馬淵和夫 1952 による収集を初めとして、多くの研究者によって収集作業が行われている。しかし、それらの成果は統合されておらず、全体像を把握することは難しい。まずこれら既存資料の整理を行い、資料間の異同等を参考に分類を行う。佚文の分類は、①［原本系］・②［宋本系］・③［それ以外］の 3 分類で進めるが、研究の過程でさらなる分類が必要になる可能性もある。既存資料の整理には、上田正 1985 が多くの情報を掲載しているので、これを参照しながら進める。

具体的な作業としては、まず従来の研究で収集された既存資料の整理・分類およびデータベース化を行うとともに、従来の研究では収集されなかったものの佚文が含まれると期待される資料に関して、情報収集および調査を開始する。近年、日本語学の分野では、北海道大学・池田証寿氏を中心としたプロジェクト「平安時代漢字字書研究」（HDIC）において、原本『玉篇』や『篆隷萬象名義』等の一部資料について徐々にデータベース化が進められており、本研究においてもその成果を取り入れ、データベース作成を進める。

そのほか、台湾・台北の故宮博物院附属図書文献館をはじめ国内外数か所の図書館等で資料調査を進める。台湾・故宮博物院では楊守敬旧蔵の『玉篇』関連資料を確認する。

(2) データベースの作成構築：

収集・分類した『玉篇』佚文資料を活用するために統一したフォーマットを確定し、データ入力およびデータベース作成を進める。『玉篇』佚文資料に適したデータベースのフォーマットを確定した上で既存資料データの入力を開始し、データベース作成を進める。データ形式は、澤田 2008、澤田 2011 で作成した『玉篇』関連資料の反切データ表を基礎にしながら、（a）佚文見出し字、（b）資料名称、（c）資料における所在、（d）反切用字（e）音韻情報等を順次入力する。「音韻情報」には中古音における音韻的類型（声類・韻類・調類・等類等）を付加する。入力作業は主として申請者本人が行うほか、一部の作業については、所属研究機関の大学院生やオーバードクター（計 2 名に依頼予定）に作業補助を依頼して進める。また、音韻資料として利用しやすい形式とするため、各データには出来るだけ漢語中古音の音類情報（声類・韻類・調類・等類など）を付すこととする。

(3) 音韻体系の分析：

構築されたデータベースから反切音注などの音韻データを抽出し、中古音体系を参照軸とした中国音韻学の手法を用いて、音韻分析を行う。音韻データの基礎資料として原本『玉篇』反切を収録する『篆隷萬象名義』反切データの整理を行い、佚文データとの関連付けを試みる。

４．研究成果

・ 成果の概要

本課題で得られた成果は主として、（1）『玉篇』佚文資料の分類、整理およびデータベースの構築、（2）『玉篇』佚文 DB 検索システムの公開、（3）音韻体系の解明に大別される。以下、詳細を述べる。

(1) 『玉篇』佚文資料の分類、整理データベースの構築：

各種古典籍に引用される『玉篇』佚文について、これまでに公開されている収集結果を分類整理を行い、原典との照合を行ったうえで、統一したフォーマットを策定してデータベース化を進めた。本課題においてデータベース化が完了したものは、以下に挙げるように 16 種の資料から抽出した計 1344 条のデータであるが、このほかにも整理中の資料が５種、計 675 条あり、今後統合の予定である。

- 1：〈資料名〉：『三教指帰注集（成安注）』，<成立年代>：11 世紀末（1088 年序），<条数>：345，<確定底本>：『三教指歸注集』（大谷大学，1992），<参考資料・論文>：佐藤義寛 1992 『三教指帰注集の研究』，大谷大学。
- 2：〈資料名〉：『令集解』，<成立年代>：9 世紀中葉，<条数>：192，<確定底本>： 巻四まで『国史大系』本，以下『国書刊行会』本，<参考資料・論文>：井上順理 1966 「令

集解引玉篇逸文考」(『鳥取大学教育学部研究報告』17)，西宮一民 1969 「令集解と玉篇」（『万葉』70)，京都大学令集解研究会 1977 「『令集解』に於ける『玉篇』利用の実態」（『鷹陵史学』3，4)，林紀昭 1976 「『令集解』所引反切攷」(『古代国家の形成と展開』，吉川弘文館)。

- 3：〈資料名〉：『中論疏記』，<成立年代>：8 世紀後半，<条数>：185，<確定底本>： 大正蔵 65，安澄撰『中観論疏記』校註（南都仏教 (38)，1977)，<参考資料・論文>：西崎亨 1979 「『東大寺図書館蔵中観論疏記（巻六末)』引玉篇佚文考」(『訓點語と訓點資料』62)，白藤禮幸 2004 「安澄撰『中論疏記』所引の「玉篇」について」(『二松學舍大學大學院紀要』18)。
- 4：〈資料名〉：『大治本新華厳経音義』，<成立年代>：奈良末期，<条数>：172，<確定底本>：『古辞書音義集成』7；p59-86，<参考資料・論文>：井野口孝 1992, 1993 「大治本『新華厳経音義』所引『玉篇』佚文（資料)」(愛知大学『国文学』32，33)。
- 5：〈資料名〉：『新訳華厳経音義私記』，<成立年代>：8 世紀後半，<条数>：101，<確定底本>：『古辞書音義集成』1，<参考資料・論文>：井野口孝 1985 「『新訳華厳経音義私記』所引『玉篇』佚文(資料)」(愛知大学『国文学』24，25)。
- 6：〈資料名〉：『五行大義』(書入注)，<成立年代>：鎌倉初～中期，<条数>：64，<確定底本>：汲古書院影印本（『古典研究會叢書』1989-1990 年)，<参考資料・論文>：中村璋八 1976『五行大義の基礎的研究』(明徳出版社)。
- 7：〈資料名〉：『浄名玄論略述』，<成立年代>：8 世紀前半，<条数>：57，<確定底本>：『日本大蔵経』25 巻：方等部章疏 5，<参考資料・論文>：井野口孝 1998 「智光『浄名玄論略述』に引く『玉篇』の佚文について」(『大谷女子大国文』28)。
- 8：〈資料名〉：『無量寿経鈔』，<成立年代>：1297 年，<条数>：56，<確定底本>：浄土宗全書 14，<参考資料・論文>：「浄土宗全書データベース」。
- 9：〈資料名〉：『沙弥十戒並威儀経疏』，<成立年代>：761 年成立，<条数>：51，<確定底本>：『日本大蔵経』22 巻：小乗律章疏 1，<参考資料・論文>：井野口孝 2001 「法進『沙弥十戒并威儀経疏』にみえる『玉篇』佚文について」(『京都府立大学学術報告：人文・社会』53)。
- 10：〈資料名〉：『因明論疏明燈抄』，<成立年代>：781-782 年，<条数>：38，<確定底本>：大正蔵 68，<参考資料・論文>：井野口孝 2005 「善珠『因明論疏明燈抄』所引『玉篇』佚文攷」(『国語文字史の研究』8，和泉書院)。
- 11：〈資料名〉：『秘蔵宝鑰鈔（敦光注)』，<成立年代>：12 世紀初，<条数>：21，<確定底本>：『真言宗全書』巻 11 巻，<参考資料・論文>：西崎亨 1987 「平安末写〈秘蔵宝鑰鈔〉所収典籍」(『国書逸文研究』20)。
- 12：〈資料名〉：『仏説観普賢菩薩行法経記』，<成立年代>：888 年，<条数>：18，<確定底本>：大正蔵 9，<参考資料・論文>：神鷹徳治、山口謡司 1988 「『観普賢菩薩行法経記』所引原本系〈玉篇〉」(『国書逸文研究』22)。
- 13：〈資料名〉：金沢文庫本『白氏文集』，<成立年代>：12 世紀初，<条数>：17，<確定底本>：大東急記念文庫影印本（1983 年)，<参考資料・論文>：神鷹徳治、當山日出夫 1984 「金澤文庫本〈白氏文集〉書入所引佚名書音義注」，『国書逸文研究』14。
- 14：〈資料名〉：『三教勘註抄（敦光注)』，<成立年代>：12 世紀初，<条数>：13，<確定底本>：太田次男ほか「平安末写三教指帰敦光注について：解題と飜印」(1968 年)，<参考資料・論文>：西崎亨 1982 「玉篇逸文（『平安末写三教指帰敦光注』所引)」(『国書逸文研究』8)。
- 15：〈資料名〉：『医心方』(安政刊本)，<成立年代>：原本 984 年成立，<条数>：12，<確定底本>：『日本古典全集』第 5 期（1935）複製本，<参考資料・論文>：西崎亨 1987 「刊本〈医心方〉所引原本系〈玉篇〉」(『国書逸文研究』20)。
- 16：〈資料名〉：『著作最秘抄』，<成立年代>：(1808 年)，<条数>：2，<確定底本>：『北野文叢』88(『北野誌』，国学院大学出版部，1909-1910)，<参考資料・論文>：上田正 1985b 「玉篇逸文論考」(『訓点語と訓点資料』73)。

(2) 『玉篇』佚文 DB 検索システムの公開

（1）で構築したデータベース内のデータについて、テキスト検索可能なシステムを作成し、web 上に公開した。「親字」、「玉篇の該当巻」、「部首」、「本文」の各項目から検索可能な形としている。

同システムについては、2022 年３月にシンポジウム「古辞書・漢字音研究と人文情報学」（オンライン開催）にて概要説明を行った。

- 「玉篇佚文検索システム」

http://yupian-yiwen.com/CharacterSearch01/charsearch/csm_search/

(3) 音韻体系の解明

当初は本課題の対象となる『玉篇』佚文に含まれる音韻資料すべてを網羅する音韻体系の解明を目指す予定であったが、作業を進める過程で資料ごとの時代や性質の差異が大きいことが判明し、音韻資料に関する考察については個別資料ごとに行うこととした。具体的には、特に以下の各資料について分析を行い、次のような成果を得た。

・ 『新訳華厳経音義私記』所引佚文

８世紀後半に成立した『新訳華厳経音義私記』所引『玉篇』佚文の義注について、『篆隷萬象名義』及び原本『玉篇』残巻の義注との対照分析を行い、『私記』所拠『玉篇』の版本について考察した。その結果、『私記』所引佚文は『名義』との類似性が一定程度見られる一方で、残巻との類似性は低いことが判明した。ここから『私記』所引『玉篇』は『名義』と近い性質を持つ『玉篇』に拠ったものであり、おそらくは『私記』が成立した８世紀後半当時通行していた『玉篇』の様相を反映すると考えられる。同成果は澤田 2021 として公表した。

・ 『龍龕手鑑』所引佚文

10 世紀末に成立した『龍龕手鑑』所引『玉篇』佚文の反切音注について、『篆隷萬象名義』および宋本『玉篇』の反切との対照分析を行った。その結果、『龍龕』反切が『名義』、宋本の反切とは異なること、とりわけ『名義』との差異が大きいことが判明した。これは岡井 1933 が夙に指摘する点とも矛盾がない。また、『龍龕』に含まれる多くの直音注は敦煌出土『玉篇』との類似性が高く、高田時雄 1987 等が指摘する唐末五代における『玉篇』の「大衆化」的側面が見られることがわかった。分析内容については、2018 年８月に「中國音韻學研究第二十屆國際學術研討會」（中国・西安）にて発表した。

・ 『三教指帰注集（成安注）』所引佚文

11 世紀末に成立した『三教指帰注集』所引佚文の反切音注について、『篆隷萬象名義』および宋本『玉篇』反切との対照分析を行った。その結果、『三教指帰注集』所引『玉篇』は全体的には原本系に近いこと。ただし、『名義』と一致せず、宋本とのみ一致する例が少数ながら存在することから、所拠『玉篇』は『名義』所拠や宋本とは異なるものであったことが判明した。同時期に成立した敦光注が宋本を利用するのとは異なる状況を反映しており、平安後期の日本における『玉篇』受容の多様的実態を知ることが出来る。成果については、2022 年 3 月に「シンポジウム：古辞書・漢字音研究と人文情報学」（オンライン開催）にて発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 澤田達也	４．巻
２．論文標題 唐代《玉篇》演變考：以《新譯華嚴經音義私記》爲主要對象	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中國音韻學：2016國際高端學術論壇論文集	６．最初と最後の頁 146-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 澤田達也	４．巻 55
２．論文標題 《經典釋文》脂之韻反切用字的分布：與《玉篇》反切比較	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都産業大学論集（人文科学系列）	６．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 澤田達也
２．発表標題 「玉篇佚文検索システム」の試作および『三教指帰』成安注所引『玉篇』佚文について
３．学会等名 シンポジウム「古辞書・漢字音研究と人文情報学」
４．発表年 2022年

１．発表者名 澤田達也
２．発表標題 中国の字書 ・音義書
３．学会等名 東方学会第64回国際東方学者会議（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 澤田達也
２．発表標題 唐末五代《玉篇》淺析：以《龍龕手鑑 》所引佚文為主要對象
３．学会等名 中國音韻學研究第二十屆國際學術研討會（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 澤田達也
２．発表標題 『玉篇』佚文資料を用いた音韻研究の試み
３．学会等名 公開シンポジウム漢デジ2017
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関